美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

7

2021 July/August

TAKE FREE

NO.66

特集

ほとりあの畔（ほとり）で

庄内憧憬

藤森武

写真家

Cradle 7

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2021 July/August

令和3年7月1日発行（隔月奇数月発行）第11巻6号（通巻66号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-31（マッ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／湯野浜

波音と潮の香を遊ぶ　海は夏色

荘内銀行

第二の心の故郷

藤森 武

東京に生まれ育って故郷がない。庄内地方は第二の心の故郷になりつつある。

庄内、酒田市生まれの師・土門拳は幼少時代、祖父母に育てられた。祖父母の家は貧しく、孤独な寂しい幼少期であった。「5歳か6歳の時に、借金取りに責められている祖母の涙声を障子のかげの炬燵(こたつ)の中で聞きながら、『貧乏だからだ、貧乏だからだ』と蒲団をかんで悔し泣きに泣いた記憶がある。」(土門拳著『ぼくと酒田』より)

先日亡くなった橋田壽賀子の不朽の名作『おしん』の舞台となった酒田の日和山公園にある日枝神社の鳥居前に立った時、近所に生まれた土門は、男版「おしん」ではないかと思い起こした。

土門6歳の春に、一家は生活の打開をはかるため東京に転住した。以後愛憎半ばする古里(ふるさと)への再訪は41年後となり、土門47歳、酒田山王祭の取材であった。その時酒田の人々は大歓迎してくれたことは言うまでもないが、「日本一の写真家になって酒田に帰るんだ」と心に決めていたようで、次に訪問した64才の時は、まさに「日本一の写真家」であった。その翌年酒田市は土門に「名誉市民第一号」の称号を贈った。感激した土門はそのお礼に自分の全作品を酒田市に寄贈した。

そして1983年にオープンしたのが日本最初の写真専門美術館「土門拳記念館」である。

最上川河口近く飯森山を背景に拳湖(けんこ)(人口池)に浮かぶように建てられ、池奥には鳥海山が恥ずかしいほど、すっきり見える。谷口吉生設計の建造物と自然がマッチし風光明媚なのである。

私が酒田に招待されたのは記念館開館式であった。その5年後には記念館の学芸担当理事となり現在に至っている。毎年の理事会、その時々の展示会の作品選定だけでも年に5回は上酒している。

鶴岡、酒田を中心とした庄内地方は、土門の影響が強いのか昔からアマチュア写真家が多い。鶴岡市羽黒町観光協会主催の「出羽三山の里フォトコンテスト」、酒田市では「土門拳杯写真コンテスト」などが庄内の写真芸術向上のために毎年開催され、20年以上審査を引き受けている。

そのためか庄内地方の人たちから庄内の特産物がいろいろ送られてくる。春は山菜、根曲がり竹、夏は砂丘メロン、盆明けの白山だだちゃ豆、秋は月山きのこ、柿など枚挙にいとまがない。酒好きな私にとっては夜の酒田も大好きである。庄内平野は米どころなので名酒が多い。夏の岩牡蠣は大きくて安い。冬は寒鱈のブツ切り汁で一杯やるのが楽しみである。一年中、菜食中心の精進料理もいい。

特急「いなほ」で酒田駅に着くとラーメン屋へ直行する。酒田はラーメン店が多く有名だが、亀ケ崎にある有名蕎麦屋の名を模したラーメン店はいつ行っても長蛇の列を成しているが絶対に並ぶ(東京では並ぶのが大嫌いなので並んだことはない)。庄内の食文化の素晴らしさを大いに広めてほしい。

酒田は師・土門の古里ということで私は得をしているが、東京に生まれ育って故郷がない自分には、庄内地方は第二の心の故郷になりつつある。

土門拳記念館で開催中(～7/11)の「亀倉雄策と土門拳」展の特別企画で、5月29日にグラフィックデザイナーの上條喬久さん(左)と対談。
「グラフィックと写真」をテーマに二人の巨匠のエピソードを交え語り合いました。

ふじもりたけし／写真家。1942年東京生まれ。19才で写真家土門拳の内弟子となり、土門拳後期代表作『古寺巡礼』(全五集)の助手を務める。28才でフリーランスとなり、その後、華道家勅使河原蒼風の専属写真家も務める。主な写真集は、『獨楽 熊谷守一の世界』(『ざる 狂言師野村万作の藝』(講談社)、『現代の肖像 百俳人』(四季出版)、中村昌生監修『国宝・重文の茶室』(世界文化社)、『隠れた仏たち』(全五巻)(東京美術)、『鉈彫荒彫・謎の木彫仏』(玉川大学出版部)、『信楽古壺大成』(『日本の観音像』(小学館)、『仏都会津 祈りの里の仏たち』(福島民報社)、中西薫編著『丹波の名陶』(求龍堂)、『別冊太陽 みちのくの仏像』(平凡社)。日本文化伝承のための写真をライフワークにしている。日本写真家協会会員。土門拳記念館学芸担当理事。

特集

ほとりあの畔（ほとり）で

自然は、生活の一部だった時代から活用する場へ。今、日々を過ごしている中で
「自然の中で生かされ、生きている」と実感することは、そこに意識を向けない限り
難しいことのように感じます。鶴岡市大山の高館山と上池・下池、都沢湿地は
自然と人とがどう共にあったのかを体感できる一つのエリアです。
そのほとりに立つ「鶴岡市自然学習交流館ほとりあ」は、
変化し続ける自然を見つめ、自然と人とがつながるきっかけを作ってきました。
“子どもが子どもでいられる場所、大人が子どもに戻れる場所”の10年をたどります。

写真提供＝伊藤佳典、和田亮、鶴岡市自然学習交流館ほとりあ（16、17ページの一部を除く）

山、池、湿地に、樹木や草花、鳥類や魚類、昆虫など多種多様な生きものが生息するほとりあ周辺一帯。人々の生活が変わり、自然にも当然その影響がある中で、美しい景観と多様な自然を残すこのエリアを対象に、鶴岡市は「庄内自然博物園」構想を展開してきました。

ほとりあの畔で自然と向き合う

「高館山、上池・下池やその周辺一帯を自然学習のフィールドとして、自然との一体感を享受できるように、自然と触れ合う機会を創出する」

鶴岡市では30年ほど前から、自然を活用した地域づくり「庄内自然博物園」構想を推進してきました。その重点整備地域の都沢湿地に設けられたのが鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」です。生態系や環境の識者である林田光祐さんにお話を伺いました。「湿地は低地の浸水域で、田んぼも米をつくるための人工的な湿地です。自然の湿地はほとんど見られなくなりましたが、本来はごく身近な環境です。都沢湿地も20年以上前は水田でしたが、下池に隣接する立地だったため、耕作をやめると自然の湿地が再生したんです。季節によって彩りが異なる、それはにぎやかな湿地でした」。

しかしその後、ヨシなどの大型の植物が増え始めます。「ヨシ一辺倒になれば多様性は低くなります。でもヨシが増えるのは自然の流れ。自然の遷移（せんい）です。遷移が進んだ湿地は本来、洪水や土石流など自然の力で壊れ、元に戻ります。でも今は洪水を防ぐ堤防やダムがある。現代の人の生活を維持しながら、手を入れずに湿地を維持することはできない。人が活用しながら守る、その両立が必要なんです」。林田さんらは、都沢湿地を多様な生物が生息できる環境に再生するために「人の手を入れること」を整備の柱とします。その理念として採用したのが、調査をしながら状況に応じた方法で保全を進めていく「順応的管理」。湿地の草刈りや外来生物であるアメリカザリガニやウシガエルの捕獲など、現在続いている保全活動はここから始まりました。

「保全、保護、利用。育った環境や体験で人それぞれに『自然』に対する考えは違っています。でも、自然が持つ生命力には誰もが感動しますよね。都沢湿地は自然が本来持つ再生するたくましさと、多様な生き物が共存することの魅力を感じてもらえる場なんです」。多様な自然、多様な人、多様な目的。ほとりあは「自分は何ができるか」を考え活動を行う拠点として、この10年を歩んできました。「さまざまな生き物が生息できる環境をつくり、それを楽しみにする人たちが集う。見に来るだけでもいい。自然を楽しみ活用する、その輪が広がった10年だったと思います。今後も多くの子どもたちに自然の魅力を伝えたい。そして、上池・下池、高館山の森へと活動の場を広げていきたいですね」。

高館山

標高273mの低山に、ブナやナラ、ケヤキ、トチなど100種にのぼる樹木と、寒地と暖地の植物が混生。市街地に近い小さな山の中で多様な動植物に会うことができる。県内2カ所の自然休養林のうちの一つ。森林浴の森100選。

昭和初期、水田だった頃の都沢湿地
（写真提供＝鶴岡市大山自治会）

昭和39（1964）年頃は下池でボート遊びなどもしていた（写真提供＝水口亮）

昭和60（1985）年、下池での魚とり
（写真提供＝太田威）

都沢湿地

高館山の東麓、下池に隣接する約7.7haの湿地。以前はおいしい米が育つ水田だった。平成11年に全域が休耕田となり、その後下池からの滲出水によって低湿地が成立。希少な水生動植物が生息する湿地環境として保全が進められている。

上池・下池

治山治水の水害対策と農業用水のため池として築造。高館山と八森山からの沢水や湧水を水源に、古くは漁業（養魚）なども行われ、ハスやジュンサイ、コイやフナなどの食料を得たり、水泳やボート遊びなどする場として活用されていた。現在は渡り鳥たちが越冬する“水鳥の楽園”で、散策道が整備された親水空間となっている。平成20年にラムサール条約湿地に登録。

保全管理ワーキンググループリーダー
林田 光祐さん
庄内自然博物園構想推進協議会アドバイザー。ほとりあ設立以前から都沢湿地の保全活動に参画。山形大学農学部教授。

平成24年4月に、「大山下池の〝ほとり〟に、自然を（あ）愛する人が（あ）集まる場所」となるよう願い誕生した鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」。「まもる・まなぶ・つかう」活動で、人と自然を結び続けています。

ほとりあを人が自然とつながるための入り口に

地元産木材による木の温もりと吹き抜けの開放感、そして窓の外一面に広がる青々とした自然の眺望。都沢湿地の北端に建つ鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」は、今年4月に開館10年を迎えました。初年度からの来館者総数は延べ23万人。地域内外から幅広い年代の人々が集い、周辺の自然に親しんでいます。

平成29年度にほとりあの館長に就任した富樫均さんは、開館当時は地元大山小学校で校長を務め、教育現場でほとりあを活用した自然体験学習を進めていました。「学校では以前から『大山の自然は地域の宝』と話していたので、地域にこういう施設ができたのはありがたかったです。ただ当のほとりあからしてみると、都沢湿地をはじめ自然環境は刻々と変わるので、この10年は自然の遷移を目の当たりにしながらの模索の日々だったと思います」。

下池からの滲出水によって、貴重な湿地が形成されてきた都沢湿地。その環境をいかに保全していくかという命題を元に始まったほとりあは、開館以来、乾燥化が進む湿地の保全管理活動「まもる」を基軸に、教育普及活動「まなぶ」、里山利活用活動「つかう」の3本柱で事業を展開してきました。中でも近年力を入れているのが、外来生物活用プロジェクトやマコモ活用事業などの利活用活動です。「保全は大事ですが『まもる』と『まなぶ』だけでは自然への入り口が狭くなってしまいます。そもそも人間は自然を利用しながら暮らしてきたので、自然を守りながら使うことは本来的なことです。自然や人と触れ合い、居心地の良さや楽しさを感じて、じゃあ自分は何ができるかと動いてみる。そのための入り口を増やし、たくさんの人を自然につなげることが、ほとりあの役目なんだと思います」。

同時に今後取り組んでいきたいと話すのが、国有林である高館山の保全管理です。今までは行政管轄が異なる点が壁となり、自然環境の変化や市民ニーズに柔軟に対応を進める点で課題がありました。「でも来る人の立場になれば、高館山も下池も都沢湿地も同じエリアの自然ですからね。これからの10年は関係各所に働きかけながら、ほとりあが高館山を含んだフィールドを一塊として取り扱い、皆さんが安心安全な環境で自然と触れ合っていけるようにしていきたいです」。

30年前に高館山で目にした一面のカタクリ畑の景色が忘れられないと話す富樫さん。環境の変化によってその風景が今は見られないものの、ほとりあに車を停めて山に入れば、あっという間に異次元の世界が広がります。人が自然につながる入り口は、すぐそこにあるのです。

鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」館長
富樫 均さん
専門は地質学。前職は鶴岡市立大山小学校校長。長く教育に携わった後、平成29年度に館長に就任。

マコモの利活用①

都沢湿地の多様な湿地環境をつくるために刈り取っているマコモで、リースや納豆づくり。

マコモの利活用②

令和3年度は「TOTO水環境基金」の助成を受けてマコモの粉末利用を展開する。

鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」
鶴岡市馬町字駒繋3-1
[入館料] 無料
[開館時間] 9:00～16:30
[定休日] 火曜日、12/29～1/3
（火曜が休日の場合は翌日休館）
※トイレは休館日も利用可
tel.0235-33-8693
http://hotoria-tsuruoka.jp/

平成28年度 経団連自然保護基金の助成を受け、整備したどろんこ広場。地元の保育園児や小学生が五感を使って湿地を体感する場になった。平成30年度には荘内銀行ふるさと創造基金助成を受け、田植え&収穫体験も実施。

都沢湿地に生息する動植物の中には、希少な植物やトンボも確認。保全活動の継続で、外来種は減少し、ガムシやヘイケボタルなど復活した動植物が見られるようになった。

まもる

ほとりあで「守る」を考える

子どもの頃から遊び相手だった自然と これからも一緒に。武田さんは昔から変わらない「知りたい」という自然への好奇心を原動力に「まもる」活動に参加しています。

「自然を守る活動というより、昔も今も自然に遊んでもらっているような感じです」と話す武田桂三さんは、ほとりあができる前から市が行っていた都沢湿地保全活動に参加しています。「一面にあったブタクサやセイタカアワダチソウが今はほとんどなくなって、みんなの力はすごいなって。『守る』といっても2つあって、例えば高山植物はそっとしておくことが守ることにつながりますが、里山として利用した自然は手をかけずには守ることができない。自然にしてみれば迷惑な話かもしれないけれど、人が関わることが守ることにつながるものもあります」。

ここ10年来の都沢湿地の自然の遷移を見てきた武田さんは、理想的な環境だった姿ももちろん目にしています。前出の林田光祐さんは、その湿地を再現するには「自然再生の仕組みのポイントに、『かく乱』があります」と話します。

かく乱とは、土壌を〝かき混ぜる〟こと。東日本大震災でも津波の跡の水田に、かつて生息していた湿地の植物がよみがえりました。これもかく乱による再生です。しかし、津波や洪水は人にとっては災害。そこでほとりあでは、人為的に土壌をかく乱し、土の中で休眠している埋土種子を目覚めさせ、湿地を再生する保全管理を進めてきました。「かく乱を始めたら、絶滅危惧種の『ミズアオイ』がたくさん出てきたんです。きれいな花でね。でも他の植物に押されて2年ほどで消えてしまって。何年かして親水水路で見つかった時、この花を残したくて都沢湿地で育て始めました」。しかし、かく乱による多様な動植物の復活を期待しても〝予測できない〟のが自然。その後、都沢湿地には大正時代に食用として持ち込まれたウシガエルとその餌であるアメリカザリガニが増え、定期駆除を行っています。どちらもかつて食用として「利用」してきた外来生物です。そこでほとりあでは、ウシガエルとザリガニを食材として料理店などで提供する「外来生物活用プロジェクト」を立ち上げ、〝食べて環境保全〟を実践。「守る」活動の先に、すべての命を尊重する「学ぶ」「使う」活動を展開しています。「子どもの時、自然の中で興味本位で何かを食べたり何かを使って遊んだりして、食べられるか、触っても危なくないか、経験を通して選び取る力や判断力が身につきました。これも活用ですよね。自然は生物が生きていく基本にあるものですから、子どもたちには積極的に木や植物や虫に触れてほしい。その経験を持つことで、命の大切さや自然を守る感覚が身につくと思っています」。

ミズアオイは『万葉集』にも登場する湿地の植物で、昔は染料や食用などに利用された。水田雑草として多く見られたが、薬剤散布等で激減。現在は国の準絶滅危惧種（NT）に指定。

ほとりあでは活動の柱「まもる」「まなぶ」「つかう」を進めるボランティアのサポーター制度を導入。外来動植物の駆除やそれらを生かした料理、作品開発、自然観察や学習など、サポーター同士つながり合いながら多岐に活動している。

湿地を重機で「かく乱」することで、土壌中に発芽能力を持ったまま眠っている種子（埋土種子）を目覚めさせ、小型湿地性植物の再生を目指す。

特集 ほとりあの畔（ほとり）で

自然遊びが好きな武田さんが作ったヨシの葉のバッタ。

武田 桂三さん

ほとりあサポーター。寒河江市に生まれ、20代で仕事のため鶴岡市に。子どもの頃から自然に親しみ、ほとりあ設立以前の都沢湿地保全クラブ「かえるの会」から参加。日本冬虫夏草の会所属。

つかう

山野草で草木染めを。ほとりあのある暮らし。

開館当初からサポーターに登録し、事務作業やイベント運営をサポートしてきた荻野重子さん。数年前からは周辺の植物で草木染めをする「そめりあ」の1人として精力的に活動しています。

自然の利活用を目的に、平成27年に発足した草木染めサークル「そめりあ」。毎月第3金曜日、ほとりあの学習交流室で活動を行っています。「最初の頃は外来植物のセイタカアワダチソウやハルジオンなど湿地の保全管理にも貢献できる植物で染めていましたが、緑や黄以外の色も出したいと、落ちた椿の花びらや下池のヒシなど、さまざま試すようになったんです。そのうち自分で草木染め用に藍と紅花を栽培するメンバーも現れて（笑）。草木の種類は数限りなくあって、次々と染めるものが出てくるからまったく飽きないし、楽しいですね」。

そう話す荻野重子さんは10年来のサポーター。開館の直前、下池散策のついでにほとりあを見学し、その帰り道でばったり会った同級生から「大山で生まれ育って、大山に長くお世話になってきたんだから、ほとりあのサポーターになったら」と勧められたことが登録のきっかけとなりました。以来、毎週水曜日に2時間ほど事務作業を手伝うようになり、昨年からはイベント補助をするように。ほとりあは荻野さんの生活になくてはならないものになっています。「サポーターを続ける理由は、やはり楽しいからです。関わる機会がなかった年代や職種、地域の人とも仲良くなったし、スタッフの皆さんもいつも明るく迎えてくれるし、自然のことも学んで、興味も広がったし。ほとりあに来ると、しょっちゅう笑っているんです。まだ館内に入ったことがないという人は、ぜひほとりあを活用してほしいですね」。

メンバー全員で草木染めしたものを、加工が得意なメンバーが仕上げ、作品に。里山マルシェなどで販売してきた。

草木染めサークル「そめりあ」の皆さん

荻野 重子さん

鶴岡市大山生まれ、市内在住。ほとりあサポーター、サークル「そめりあ」所属。マコモや笹など、季節の植物をお茶にする活動にも参加している。

まなぶ

2013年度の「いのち学」より

ウシガエルを食べる会

捕獲したウシガエルの解剖体験

都沢湿地のウシガエルの駆除体験

ほとりあでの学びが自分の夢の原動力に。

平成24年の開館当時、大山小の5年生だった佐藤さんは現在、動物看護師を目指して勉強や実習に邁進中です。佐藤さんの人生に大きな影響を与えたほとりあでの思い出を伺いました。

大山で生まれ育った佐藤葉由美さんが、ほとりあに行くようになったのは小学5年生の時。近くに住む祖母に誘われて、開館式のテープカットを見学したのが始まりでした。以来、学校が終わると毎日のように遊びに行き、「一緒に成長した」と話すくらい、ほとりあは佐藤さんの成長を支える大きな存在となりました。

特に影響を受けたのが、かつて開催されていた「いのち学」です。この講座は、外来生物が都沢湿地に生息するようになった時代背景と現状を学び、実際にウシガエルを捕まえ、解剖し、食べるという一連を体験し、命について考えるもの。葉由美さんは当時6年生でした。「ウシガエルもザリガニも人間の手で外国から連れて来られたのに、今は駆除されるものになっています。それを知って人間の責任の大きさを感じました。同時にその生き物たちの命を思って自分に何ができるのかと考え、命をいただくことのありがたさも感じました」。

もともと自然や生き物が好きだったという佐藤さん。この体験を経てより深く生き物に興味を持つようになり、現在は、外来生物も含めた生き物全般について、さまざまな分野から学ぶ専門学校に通い、動物看護師を目指して勉強しています。「私がほとりあで学び、経験したことは、人生の分岐路になるくらい大きな出来事でした。ほとりあがなかったら今の道を歩いていません。地元の子どもたちも、自然や命のことなど、いろいろなことをほとりあで学んでほしいなと思います」。

佐藤 葉由美さん

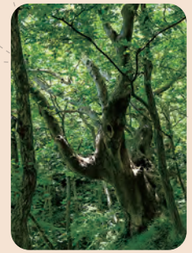
鶴岡市大山生まれ、仙台市在住。東北動物看護学院2年生。中学生の時にほとりあで合唱を披露したのも忘れられない思い出。

特集 ほとりあの畔で

どろっぱと ほとりあの ほとりを歩く

市街地から近い散策エリアとしても人気の高いほとりあの周りの自然。初夏の日差しが注ぐ6月初め、1時間のリフレッシュに出かけました。

ケヤキの巨木には洞があいているものが多い。人も入ることができる洞は多くの動物たちに利用される。



岩倉コースにあるケヤキの巨木。秋は紅葉、冬は冬芽と、夏は避暑ゾーンとして楽しめる。

サイハイラン

花の姿が戦国時代の武将が戦で指揮を執るときに使った采配（さいはい）に似ていたことからこの名がついた。

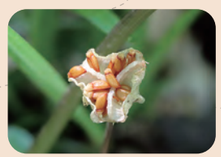
ほとりあ周辺では春から秋にかけて約35種類のトンボが見られる。今回、散策で確認されたコサナエ。

幅広い水路で確認されるハグロトンボ。オスは体が黒く緑色の光沢がある。

ゲンジボタルとヘイケボタルは水辺のホタル。高館山には陸生のヒメボタルも生息。ほとりあではヘイケボタルの幼虫を育てる「里親プロジェクト」を実施中。

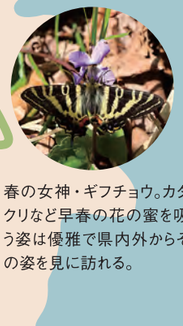
遊歩道の途中、風に乗ってノイバラのいい香りが。赤い実はローズヒップティーにも。

高館山にはブナが多く、散策道のすぐ近くでその美しい木肌に触れることができる。



スプリングエフェメラル（春の儚いものたち）と呼ばれる春植物の一種、カタクリ。早春に花を咲かせて種を作り、夏には枯れて次の春まで地下で養分を蓄える。種に付着した「エライオソーム」という誘引物質によってアリに種を運んでもらう。

木の洞の中に二ホンミツバチが巣を作り、ツキノワクマが蜜を食べに来た様子を自動撮影装置で激写! しかし穴はクマが体ごと入るには小さく、最後はテンがおいしいところを持っていったそう。



春の女神・ギフチョウ。カタクリなど早春の花の蜜を吸う姿は優雅で県内外からその姿を見に訪れる。

高館山は尾根と沢が多数入り組んで多様な環境をつくりだす。散策者の体力にあわせて楽しむことができる。

人との関わりによって、その表情を変える高館山。天領であったためむやみに樹木の伐採がされず守られてきた場所と、地域の里山として利用されてきた場所が入り混じる。

トウホクサンショウウオの卵

サワガニ

山に入るとたくさんの音に出会うことができる。沢を流れる水の音もその一つ。

7月下旬頃から上池にはハスの花が咲き始める。明治以前から続く「浮草組合」が花やレンコン（根茎）を収穫販売。

10月上旬になると上池・下池にコハクチョウが飛来する。ピーク時は池を埋め尽くすほど水鳥たちでいっぱいになる。まさに水鳥の楽園。

湿地再生の活動の中でその数が増えているキイトトンボ。鮮やかな黄色の体が印象的。

下池の水面に見える浮き葉は「ヒシ」で、水中に実や根がある。実は昔「ミズグリ」と呼ばれ食用や薬にしていた。

ザリガニ釣り

ヨシとマコモは湿地で見られる大型の多年草植物。ほとりあではヨシはストロー、マコモはクラストや粉末として利用。

水路で見つかったハスを湿地に移植し、3年前から「観蓮会」を企画、今年も7月19日に開催。ハスの花托や葉っぱもお茶として利用。

この日のコース

ほとりあ
↓
都沢湿地の植物を見ながら下池提体へ
↓
下池湖畔の遊歩道から岩倉コースへ
↓
岩倉コースの途中から瀬ヶ沢コース
↓
沢を伝って下池湖畔遊歩道へ

どろっぱと一緒に案内します！

どろっぱ

都沢湿地生まれ。年齢、性別不詳。水と光を手に入れると「どろっぱ」という呪文で辺りを緑と生きものでいっぱいにできる。じゃんけんはパーが得意。

鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」副館長兼学芸員

上山 剛司さん

ほとりあ開設と同時に学芸員として着任。森林環境教育活動をはじめ自然と人とのさまざまな関わりを推進。庄内自然博物園構想推進協議会事務局。環境教育工房LinX主宰。CradlePlusでも連載中!

庄内スマート・テロワールの庄内産小麦 麺

庄内平野と日本海を
眼下に望む広大な月山高原
その地で作られている
小麦を使った商品開発が
今、次々と進められている

国内で出回っている小麦粉の原料である小麦は、9割近くが輸入品である。近年は国産ニーズの高まりから国内での生産が全国的に増えているが、山形県は小麦の生産量がかなり低い。庄内においては、過去に病気で全滅した歴史が何度かあるため、なおさら栽培が根づかず今に至った。

しかし今、小麦栽培で地域の食料自給率を高めようとする動きが進んでいる。農と食の地域内循環を目指す「庄内スマート・テロワール」の庄内産小麦プロジェクトである。同プロジェクトでは5年前から、比較的病気に強い「ゆきちから」の栽培を「野菜農場叶野」に依頼し、ノウハウを蓄積してきた。次第に品質が安定し、生産者仲間が増え、生産量も増える中、始まったのが庄内産小麦粉の商品開発だ。

そもそも「ゆきちから」は麺に向く準強力粉である。加えて庄内はラーメン屋の自家製麺率が非常に高いため、麺づくりの技術力がある。その好条件から「酒田ラーメン花鳥風月」が筆頭となってラーメンへの活用が実現した。また庄内には小麦粉を原料とする「麦切り」文化もある。この伝統食にも庄内産を活用しようと鶴岡市羽黒町の麺工房「無量庵」と鶴岡市大山の製麺会社「すがわら製麺」がそれぞれに配合麺を開発。ラーメンの麺と同様に、地元スーパーでの小売を始めた。

さらにこの動きは麺にとどまらず、県内全域のパン屋にも広がり、他にもさまざまな小麦粉製品への検討・開発が始まっている。あとは私たち消費者がそれらを意識的に選び、食べること。そうすればこの輪はもっと大きく、強靭なものとなり、持続可能な地域の未来をつくる鍵となる。

すがわら製麺の新パッケージ版「麦切り」（乾麺）は7月から、「トー屋」、「主婦の店」主要店舗にて順次発売予定。無量庵の「麦切り（生うどん）」も同店舗にて販売中。花鳥風月の「酒田のラーメン（生中華麺）」は「トー屋」と「Aコープ」で販売中のほか、「主婦の店」主要店舗でも近日発売開始。庄内産小麦プロジェクトメンバーも随時募集中!

山形大学農学部附属
やまがたフィールド科学センター 0235-24-2278

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

薫風流れる ふれあいの森を歩く

立夏を過ぎると、
鳥海山や月山の雪渓の形は小さくなり、
日に日に山の緑が濃くなっていく。
ブナの森が最も美しく輝く季節となる。

季語
薫風（くんぷう）
青葉の中を吹き抜けるすがすがしい風。

奇形ブナ

鶴岡市たらのき代から県道351号を大網方面に向かって進んだ。冬季は雪で全面通行止めとなるこの道は、6月に入ってもまだ雪解け間もない景を見せていた。

新緑の中、タムシバの花がその白さを際立たせている。天に向かって栃や朴（ほお）の花が咲く。道の脇では蕨（わらび）が背比べするように顔を出している。手入れされた杉林の脇を過ぎると「ふれあいの森」という看板とともに突然ブナの森が広がった。

月山へ栃のかかげし男花

―水沼三郎

森に足を踏み入れた瞬間に空気が変わった。足元には優しい落ち葉の絨毯。歩くとさくっ、さくっと地面が足を受け止める音が響く。目の前には体をくねらすような姿のブナが立つ。大人が2、3人でようやく抱えられるほどの太さである。この奇形ブナは、積雪期に雪上で幹を伐採し、その切り株から萌芽して生長したところを何年後かに再び伐り、それを繰り返すうちにできるという。ブナはもともと雪の圧力に耐えるしなやかな幹を持ち、他の多くの木々よりも積雪に強い。大きく曲がるブナの根本が、雪の重みを表している。

ぶな若葉真昼の光透きとおる

―菅原謙吾

山奥に行かなくては触れられないブナを前に心を躍らせ、その幹に耳を寄せてみる。見上げると一面に、逆光にきらめき透き通る若葉。薫風にその葉を揺らしている。木々のざわめきに心を傾ける。森に差し込む光が足元の雪椿の色を鮮やかにしていた。

木漏れ日と雪椿

感覚は凛として澄んでいく。頬に感じる風、匂い、足元の感触、光、鳥の声。目を閉じ深呼吸をして、森のすべてを記憶に刻み、体の中に取り込んだ。

木漏れ日に色を濃くせり雪椿

―あべ小萩

森を後にして、途中かつて牧場があったという広大な場所を通り、まだ田植えが済んだばかりの大網の里へ降りた。

雪解け水が勢いよく田に流れ込み、畔（あぜ）には菫（すみれ）が咲いていた。雪深い里山に春を迎えた生命の勢い、歓喜の水の音が響く。何気ない日本の原風景に触れることで、どこか懐かしくほっとした。

薫風や晴れて水田の方一里

―三田きえ子

翌週、再び「ふれあいの森」を訪ねると、若葉の淡い緑はすっかり色を濃くし、白い樹肌とのコントラストを美しくしていた。

森は素敵な時間を運んでくる。忙しい毎日の中、目を閉じると、その時間の記憶が呼び覚まされ、薫風流れる森へといつでも飛んでいくことができる。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

ブナの新緑

大網の牧場跡

大網の里